批判と反省

歴史の効用について

――日本とイギリスの場合――

植村雅彦

一

イギリスに滞在していたころ、ある日曜日の新聞で、"Oxford Men Find History is so Old" という見出しではじまる小さな記事が、商売がら、私の注意を強く引いた（サンディ・タイムズ六二年二月一八日）。オックスフォードの学生のなかで、歴史を勉強する場合に、うんざりし、挫折感にとらわれ、幻滅を感ずるものがはなはだ多いと言う。教師は学生たちに、歴史の価値は人間の経験を学ぶことである、と教える。しかし学生たちは答えていわく、「過去における人間の経験が今日にとって何の意味をもつでしょうか」と。マートン・コレッジの歴史のドンであるK・G・デイヴィスは、学生たちが歴史の勉強にたいくつしていることは、彼らが歴史に関するエッセイを差し出すときのそぶりを見れば、はっきり分ると言う。それはあたかも言わんとするかのごとくである――「私は別のエッセイを書きました。それがどういう役に立つかということについてです」と。また同氏によると、歴史に不満をもつのは女子よりも男子に多いと言う。そして史学科の学生二〇パーセントを調査の対象にしたところ、約半数が歴史の勉強に興味を失っていた、と報告している。

以上は、イギリスの一流中の一流の名門大学で、今日歴史がいかに人気のないものになってきているか、という興味ある、しかしわれわれにとっては悲しむべき事実の報道である。これが直接の動機となったかどうかは自分ながらよく分らぬが、帰国後しばらくたってから、私の教えている学生にエッセイの提出を命じ、彼らが歴史の勉強をどのように思っているかを調べてみた。対象とした学生は、主として歴史を専門とする史学科の学生である。また私が彼らに示した論題は、「現代生活における歴史研究・歴史教育の意味について」というにあった。正直に言って、教壇に立つ私自身にもよくは分らぬ問題であったけれども、私はあえて

声をはげまし、どんなことでもよいから率直に書くように、また参考書に頼らず、めいめいの頭で書くように申しわたしておいた。一ヶ月ほど経過したころ、私の手もとには約二五ほどのエッセイが集まったが、怠惰な私は、目下のところ、それらをあざやかに分類・整理するまでに至っていない。しかし、概して言えることは、歴史を専門に勉強する学生でありながら、現代生活における歴史の意味ということについて自信をもつことができないでいるのではないかとの印象である。もっとも学生諸君はおのおの一かどの御託を並べている。たとえば、「歴史を知らなければ、現代を理解できない」とか、「歴史を学ぶことによって現代をよりよく生きることができる」とか、「国際感覚、国際知識を養う」とか、誰でもが普通に考えるようなことを述べたてている。なかには、「無味乾燥とも思える現代社会にうるおいを与える」とか、「人間の心のよりどころとなり、オアシス的役割をはたす」とか、いささか詩人肌の主張も見られた。しかし、気の廻し過ぎかも知れないが、そういう言葉の何とそらぞらしく私の耳にひびいたことだろうか。彼らの多くは、「歴史研究を自分の仕事として一体何の役に立つのであろうか」との問題をもって書き出している。次には、中学・高校の歴史教育が受験本位の、いかにつまらぬものであったかを異口同音に書き立てる。大学の講義や演習にも、決して満足は感じていないらしい。しかし、利口であるから、はっきりとそう言わない。多少とも言葉を濁してそこからは逃げながら、現代において歴史がやはり必要・不可欠と言い、その理由を上述のような表現をもってさし示す。その多くは、ありきたりの本を読んで得た借り物である。学生自身の頭の中から出て来たものではない。従って、学生諸君は自分たちの書くことに確信がもてないでいるように見受けられた。大先生方の整然たる立論も、彼らの疑惑と迷いとを氷解するには至らない。一応の理屈としては分るが、一歩入りこんだ具体的な所がよく分らないというのが彼らの正直な声である。ある学生は、「つまり前に書いたような何のために歴史を勉強するのかという根本的な考え方が身に滲透していないので、ひたすらに歴史と取り組むことができない」と率直に告白している。いかに声を大にして歴史の必要なことを説かれようとも、若い人々の頭のなかにある現代生活と歴史との間の大きなずれをうずめることはできないのだ。歴史を専門に勉強しようとする学生にあってすらそうである。いや、歴史を商売に選んだからこそ、悩みは一層大きいとさえ言えるのだ。そういう所から、「歴史研究をやって何の役に立つのだろうか」という疑惑は、多くの答案にあって、繰り返し繰り返し行間ににじみ出る。一度は、誰かの本を読んでなるほどそうかと思い、少しは悟ったようなことを書いてみても、それもつかの間、疑惑は依然疑惑として残る。要するに、彼らの本音は「どうも役に立ちそうにない」というところにあるらしく、歴史の先生に出すエッセイである以上、露骨に言いきってしまうわけにも行かないので、当りさわりのないことを一わたり述べて体裁をととのえているに過ぎないのである。前のオックスフォードの場合と合せ考えてみて、現代世界を生き抜くことに歴史が役に立たないという若い人々の心情は、東西まことに軌を一にすると言うべきか。

十九世紀が「歴史の世紀」であったとすれば、今世紀は「科学と技術の時代」である。科学・技術の進歩による現実のめまぐる

しい変化が、歴史において過去を学ぶことの無意味さを痛感させ、過去における人間の経験がどんなことに役立つというのかの感を起させるのは当然のことである。特に人工衛星（四七年一〇月）の登場によって、人類史上に宇宙時代が開かれてからというものは、歴史研究のつまらなさが、いよいよ強く意識されるようになってきているのではあるまいか。しかし、ひるがえって考えてみると、歴史を学んだり教えたりしても現実の世界には何の役にも立たぬという感は、決して今にはじまった事柄ではない。旧制の高等学校で、歴史は―特に西洋史―は随分と重視されたようであるが、それも実のところは教養主義という浅薄な旧制高校的理念に基いている。自分の経験を語ると、中学・高校を通じての私の学友たちは、概して歴史にかなりの関心と興味をいだいていた。その大きな理由は、幸いにして先生が立派であったからである。しかし、もう一歩立ち入って反省してみると、友人の多くは、先生の名講義に魅せられて歴史を面白い、あるいは楽しいと思ってはいたが、それが現実に間に合うとはほとんど誰も信じていなかったようである。ましてや、歴史を知らなければ、現実をよりよく生きられぬなどとは誰一人考えていなかった。歴史という学科は、いや学問は、本来そのように片偶におかれた不遇な学問である。しかし歴史を専門に研究し、あるいは教える立場にある歴史家としては、自分の商売としている学問に何らかの重要性を付したくなるのは、自然の情と言うべきか。そこで多少とも物事を深く考えることができ、少しは思索好きで、また筆の立つ器用な歴史家は、歴史の効用についてさまざまなことを従来から並べてきた。この小論では、特にイギリス歴史家がその問題に関し発表している見解を検討してみたいと思う。無論、日本の場合と比較・対照してのことである。私自身は、両者の間に相当大きな開きがあるように感じられてならない。しかし、ここで、歴史の効用について、何か新しい自分なりの見解を提示しようなどとの意図は毛頭ない。歴史の効用についての考え方の相違は、より大きな問題に連なって行く。つまるところは、両国歴史家の考え方の根本にある問題、さらには両国国情の差異といった問題にも関係してくるであろう。そして、イギリス歴史家の考え方のなかにも、何か私たち歴史家自身を心の底から納得させ、学生たちに歴史についてもう少し積極的態度をとらせるのに少しでも役立つものがあるならば、望外のよろこびである。

二

歴史を何らかの意味で現実に役立てたいというのは、およそあらゆる歴史家の念願である。すなわち、どんな歴史家でも、自分の研究が、あるいは自分の教えることが全く無用であるとは考えたくない。このことについては、イギリスの歴史家も日本の歴史家も同じである。しかし、われわれと彼らとの間には、歴史の効用ということのありかたについてかなりの相違が認められるのではないか、と私には思われる。あくまでも大ざっぱに見て、日本の歴史家が歴史学の現実に対する直接的・実践的効果を求めるに対し、イギリス歴史家の考える歴史の効用は、もっと間接的であって、具体的に言うと、人間教育というものを通しての現実への貢献が強く主張されているように、私は考えざるを得ないのである。本節では、まずわが国の歴史学が現実と直接的・実践的に結

びつくということの意味について、私自身の日ごろ思うところを述べてみたい。

私たちが尊敬する大塚久雄教授は、戦争中、正確に言うと昭和十九年四月に時潮社から出版された『近代欧洲経済史序説』の巻頭にのせられた「序」の中で次のように述べていられる。「本書の起稿以来既に約二星霜、いまトラック諸島における興廃を賭しての激戦の報を耳にしつつ、此の世界史的瞬間に上巻の序文を書き記すと云ふ巡り合はせとなった。冷静ならんとして、腹の底から筆舌につくし難い国民的感情の湧き上って来るのを如何ともしがたい。」（傍点は筆者）この終りに書かれている「腹の底から湧き上ってくるとどめがたき国民的感情」こそ、明治以来の多数の歴史家の研究・著述・教授・講演をささえていた共通の心情でなかったか。それは、ある場合には、単純素朴に富国強兵のための歴史学となり、またある場合には、大陸侵略を謳歌するごとき歴史学ともなった。大塚教授のすぐれて立派な業績を戦前もしくは戦時中に出た幾多の非科学的、独断的な歴史書と同列におくことは必ずや大方の叱責を受けるであろう。しかし私のここで述べたいと思うことは、十九世紀の中葉に鎖国の幕を破って絢爛たる機械文明の世界に、そしてまた権謀術数の渦まく冷厳な国際場裡にいきなり飛びこんだわが国が取組まねばならぬ課題は、あまりにも大きく、あまりにも重かった。うかうかすれば滅んでしまうというときにのぞんでは、歴史家といえども自分の研究が科学的にあやまりないということだけを誇っていられなかったであろう。いわば維新以来わが国のおかれた危機的情勢が不断に歴史家の国民的感情を燃焼し続け、ひいてはそれが彼らの仕事を終始直接的実践と結びつけることとなった。大塚教授の場合、『近代欧洲経済史序説』執筆の動機は、やはり巻頭の「序」のうちで次のように述べられている。「さて、ヨーロッパ、就中西欧の近代経済社会がもつ世界史的意義の一つが、その勢力圏の極めて執拗な世界的規模への拡延と膨脹にあった事は、すでに周知に属するであろう。ところで、西欧における近代経済社会はかやうな世界的膨脹を如何にして達成したか。其の現実的基礎をなすものは何であったか。それは所謂経済史の範囲内では如何なる事実に求むべきであるか。筆者はそうした『問題』を以て出発した。」ここで指摘された著者の問題的関心なるものは、きわめて現実的である。何となれば、東アジアにまで拡延され、膨脹された西欧近代経済社会の圧力こそ、幕末以降の日本が何をさておいても対決しなければならぬ難題であった。さすがに大塚教授が幼時から積まれた西欧的教養と科学者的探求精神は、教授をしていたずらなる昂奮に駆りたてることなく、一見したところ、あくまでも冷静に、西欧近代経済社会にかような世界史的膨脹を可能ならしめたものの歴史的究明に向わせている。しかし、名著「序説」の底にあってふつふつとたぎるがごとき教授の国民的感情、そこに由来する歴史学を通しての強烈な実践的意欲、これら二つのものを見落してはならぬように、私は思うのである。「序説」は、まことに、歴史家自身も国家的課題に取組みたい、もしくは取組みつつあるという意識とその科学的精神との見事な合一であると言わねばならない。もっとも大塚教授の透徹した眼は、「序説」に示されたような西欧社会の拡大、それのもたらす圧力という歴史的・現実的問題にのみそそがれたのではなかった。同時に、大正デモクラシー

の洗礼を受け、マルクスを耽読し、少年多感のころにロシア革命を体験した教授にとって、富国強兵と大陸侵略のかげにかくれた日本社会の後進性は深刻な現実的問題であり、これを何とかしたい、また何とかしなければならないというのが教授自身のひそかな宿願ではなかったか。このような現実に発する問題意識がやはり衆より傑出した科学的かつ実証的精神と結びつくところ、今日『近代資本主義の系譜』を構成する珠玉の諸論稿となって結晶した。一見したところ、本来の問題意識のうえでは、「序説」と「系譜」との間には、かなりのずれがあるかも知れない。極言すれば、前者のそれはナショナルにかたむき、後者のそれはソウシャルにかたむくと言えるであろう。両者がただ一つの問題意識に統合されるのは、教授にとって、戦後のことでなかろうかと推察される。しかし、大切なことは、また私が特にここで強調したいことは、「系譜」に集められた諸論稿もまた教授の旺盛な実践的意欲にささえられて出来上ったものであることだ。

より重要な対象として、また主要テーマとして、戦後歴史学の大勢を取扱いたい。学問の自由が保障されるとともに、幾多の俊才を迎えいれることによって、歴史学もまた輝かしい脚光を浴びて復活し、登場してきた。私の手もとには、いま数冊の問題作と呼ばれるものがある。それらのページを、それも主として巻頭のほうを漫然とくりながら、わが国の歴史家の実践的意欲といったものを考えてみたい。無論、以下に述べようとすることは、はなはだまとまりの悪い私自身の感想である。

戦後わが国の歴史学では、「日本国家」に代って「日本社会」ということがさかんに言われるようになった。日本国家の歩みとか伸長とかいうことよりも、むしろ日本社会の発展・変革のコースあるいはその特質といった問題がである。従って、それは前述した大塚教授の脳中にあった問題意識のうち第二のものの継承であり、すさまじき勢いでの展開であったと言えるであろう。説明するまでもなく、敗戦直後の日本人は荒廃した国土のうえで、空腹をかかえての建設と創造――第一歩からの――にいそしまねばならなかった。占領軍当局から民主主義日本の方向を指示され、治安維持法の徹廃、共産党員の釈放、天皇の人間宣言、新憲法の発布、財閥解体、農地改革など相つぐ一連の至上命令のもとに、未曾有の驚異的な大革新が着々と進められて行った。その大部分が他からの強制であり、押しつけであったことはいうまでもない。にもかかわらず、そのころの日本人の多くが、特に若い層が、目前に進行しつつある大革新に胸はずませながら、自分たちの前途にあやしくもまばたく光明のごときものを認め、創造と建設のよろこびに全力を投入しようとしたことは事実である。目標は、日本社会の徹底的近代化・民主化であった。言葉を換えて言うと、封建的遺制の完全なる克服であった。それは、はげしくなると、しいたげられたプロレタリアートの勝利であり、階級なき社会の実現であった。そして、このようなめざましい、希望にあふれた時代にあっては、歴史家も建設と創造に参加しなければならない。それが国民の一人としての義務であり、権利である。今日の国民的課題に背を向け、骨董的研究にふけることは、国民からの離反である。かくて戦後の歴史学は、いよいよ直接実践的方向におもむき、そこから離れ得ないものとなって行った。

以上述べたことについて、いくつかの範例を示すことにしよう。

周知のように、絶対主義論もしくは絶対君主論は、戦後における流行テーマの一つである。ところで、絶対主義がはなばなしく研究され討論された動機は、どこにあるか。河野健二氏はいわく、「絶対主義をいかに把握するかという問題は、われわれの国においては、決して歴史的興味の対象たるに尽きるものではない。われわれが民主主義を真に自らのものとなし得るか、どうかは、われわれが絶対主義をいかなるものとして把え、いかにこれと対決するかにかかっている。わたしは、このような問題意識に導かれて、ヨーロッパ絶対主義の問題を採り上げてみた。」(『絶対主義の構造』)白杉庄一郎氏になると、一層はっきりしている。「絶対主義は、多くの絶対主義論者の考えているごとく、もはや過ぎ去った歴史的事実として、我々のまえに単なる歴史的解釈の対象としてよこたわっているにとどまるといったものではない。ある意味では、絶対主義は今日なお生きて現にはたらいているといった側面をもつ。……いかに民主主義革命が徹底したところで、それがブルジョア民主主義革命にとどまるかぎり、絶対主義の本質的契機をなしていたものが残存せざるをえないということを含意する。ほかではない、広い意味の官僚制度がそれである。……この事実をつきとめたとき、絶対主義論は生きた現実の問題と直接の結びつきをもってくる。……」(『絶対主義論批判』序、傍点は筆者)ここで明らかなことがらは、絶対主義の究明とその本質把握が、日本の民衆が民主主義を本当に自分のものとして把握し、さらに西欧的民主主義革命の段階を超えて前進するうえに、いかに不可欠であるかとの現実的意識である。しかもそれは単に、絶対主義の科学的・実証的・理性的研究によって到達した高き水準の成果を、広く一般大衆に普及するといった程度にとどまらない。それと同時に、正しい歴史を書くことによって、彼らが新しい歴史の創造に参与しつつあるとの確信が、そこに秘められていなかっか。堀江英一氏は言う、「歴史を創造しつつあるもののみがまた正しい歴史学を創造し理解することができる。」(『西洋経済史』序)と。しかしまた逆に、正しい歴史学を創造し理解しつつあるものは、今日の歴史をつくりつつあるものの一人であると言えないであろうか。少くとも、このような誇りと自信とは、戦後における気鋭の歴史家多数のものでなかったか。

またたとえば明治外交史といったものについても、その意味が次のように述べられている。「我々は先ず明治時代の史実を忠実に追究することによって、反省の対象となる多くのものを見出し、同時に新日本建設の資を獲たいと思う。」(英修道『明治外交史』日本歴史新書)新日本建設との言葉は出てくるけれども、ここにうかがわれる歴史学と実践との結合なるものは、前の絶対主義論の場合と比べて、かなり低調である。この程度の実践的意欲ならイギリスでも珍らしくない。しかし、「絶対主義」と表裏の関係をなす「寄生地主制」に至ると、歴史家が所与の問題にのぞむ態度には再び昂然たるものが見えてくる。そもそも寄生地主制の研究に開拓の鍬がおろされた根拠には、やはり戦後の「農地改革」の問題がある。普通言われるように「改革」は、予期したような黄金の成果をもたらさなかったのみならず、農村は旧守的勢力の地盤として存続し、日本社会の民主化の進行を阻止するかのごとき役割を演じた。その理由中のもっとも有力なるものは、伝統的な日本農業の構造自体、とりわけ「改革」の前段階に位置した「寄生

地主制」の構造そのもののうちに求められねばならないであろう。すなわち、ここに、「『改革』の内在的評価と日本農業の現段階規定を、寄生地主制の内部的発展に即して確定しょう」（福島大学経済学会『寄生地主制の研究』）との現実的意図が必然的なものとして生れてくる。一九五八年十月に、同学会の機関誌「土地制度史学」が四季刊の形で創刊された事実にも、わが国の農村研究家の科学的研究――東西を問うことなく――と実践とのうえに両股かけた情熱のいかなるものであるかをうかがうに足るであろう。

もう一個だけ例を示そう。封建制成立の問題のごときも、戦後は特に現実的・実践的意味をになうものとされた。永原慶二氏の言葉を借りれば（『日本封建制成立過程の研究』）、その根拠としては、㈠日本史の展開を世界史の発展法則に照らして再構成・把握しようとする試み、㈡当面の現実社会における克服すべき対象としての「日本封建制」の構造的特質を、特にその性格の一側面が強く表出される形成過程に注目することによって探り出そうとする試み、㈢戦後の歴史的激動に直面して、日本社会の発展・変革のコースとその特質を、創造すべき未来像の探索と関連させつつ追求しようとする試み、の三つが挙げられる。従って日本封建社会成立史のごとき、当面の課題とはやや迂遠に見える研究テーマにしても、絶対主義や寄生地主制と同じく、歴史家の実践への参与を確証ずけるものとして、彼らの献身を促してしかるべきものと考えられたのである。

三

イギリスの歴史には、ここ数百年来、いやもっと以前から、日本の明治維新や一九四五年における敗戦に相当するような大変動や大革新を見出すことが困難である。概して、それは、緩慢なる変化の流れであった。十七世紀中葉の清教徒革命といえども、国民の経済生活と思考方式とを一時にして根底からくつがえすほどの変革であったかどうかは、疑問である。ひとあるいは産業革命の大きな改変的意味をあげて、反問するかも知れない。しかし、正直に言って、産業革命ほどにイギリス的な変化はないと思う。それは、目的意識なくして起り、徐々たる変化の積み重なりが、いつのまにか驚天動地の変革をもたらしたということなのである。イギリスを訪問し、イギリスのどっしりとした落着きぶりに驚く日本人が、滞英歴の長い、いわゆる英国通の仲間に、「一体イギリスは幾分かでも変って来ているのですか」と問う。そのような場合、大抵次のような答が返ってくるであろう。「それでもイギリスは変りつつあります。目立たない所で、じりじりと変ってきていますよ」と。まことに、イギリスとはそのような国であり、イギリス的変化とはそのようなものであるのだ。

その結果またイギリスの歴史では、国民のほとんど全部がどこからか下命された一つの課題、一つの目標に向って、遮二無二躍進するということがなかった。すなわち、再建とか創造とかいうことが、差迫った問題として、国民の前に大きくのしかかってくるという場合があり得なかったのである。今日、産業構造の変革と技術革新、また経済の高度成長は、わが国と同じように、いやわが国以上に、イギリスにとっても、死活にひびく要請である。にもかかわらず、国民全般の意気ごみは、一見したところ、とてもわれわれの国に及びもつかないように思われた。事態の重大さ

を意識しているのは、エリートの支配者層に限られているかのようであった。無論、彼らも掛声をかけ、ある場合には、叱咤激勵する。しかし、笛吹けど踊らずというのが、イギリス国民の実情であるかのように私は思う。

以上のように考えてみると、日本の歴史家とイギリスの歴史家とは、相互にかなり違った環境の下におかれてきた、と言える。前者は、実践へのはげしい意欲に燃えている、活発で動的で周囲の刺激をおのずから受けて。……たのしみのための歴史学、自己修養のための歴史学、教訓のための歴史学などは、いきおい退けられる。戦後、日本社会の民主化・近代化ということが国民の至上目標になれば、歴史家もそういう問題意識の上に立ってテーマを選定し、歴史を通して日本人の創造すべき未来像を探り出し、正しい方向を明確にしなければならない。このようにして歴史学が現実に直結する実践と結びつけられ、またその点においてこそ、わが国では、歴史の有用性ということが見出される。これに反して、イギリスでは、国全体にはげしい鼓動がない故に、われわれの問におけると同じ意味での実践的意欲をかの国の歴史家のうちに見出すことは、まず不可能である。従って、彼らは歴史の効用ということを、もっと長い目で考える。すなわち、日本の場合と比べてみて、より間接的な所に、歴史と現実との結びつきが考えられる。無論、イギリス人といえども、一般の層はともかく、専門の歴史家となれば、修養のための歴史とか娯楽のための歴史とかをまじめになって唱えるひとはない。歴史の役立つということは、もっと積極的なものであるべきだ、と考える。そこで、イギリスでは、歴史の教育的効果ということが主張されてくるのである。

私の座右には、いま数冊のイギリス人の書いた歴史そのものについての思索書もしくは反省録といったたぐいの書物が並んでいる。オックスフォードのテューダー研究家A・L・ラウスの“The Use of History”というそのものずばりの標題の書物、ケンブリッジの碩学M・D・ノールズ教授（昨年退官された）が“History”という専門雑誌（六二年一〇月号）に発表された“Academic History”という示唆的なエッセィ、よほど古くなるけれどもロンドン大学の故ポラード名誉教授の筆になる小論“The Value of History”（珠玉のような論文集“Factors in Modern History”——初版は一九〇七年、三版が三二年——のうちに所収）、少しくお役所的になるが、文部省編の歴史教育手引書“Teaching History”（初版一九五二年——Her Majesty's Stationary Office の刊行）などが主なもの。そのほかは、同じ英語国民のよしみからアメリカ人の書いたものを二種類ほど取出してみた。オハイオ州立大学の故ホケット教授のきわめて親切な史学研究入門書“The Critical Method in Historical Research and Writing”（一九五五年版）、および故ケネディ大統領のブレーンとなったハーバード・メンの一人、そして無論アメリカにおける第一級の歴史家A・シュレジンガー・ジュニアーの“The Historian and the History”という簡潔で興味あるエッセイ（『日米フォーラム』六三年八月号所収）。

以上のような単行本あるいは小編を材料にして、かの国で考えられた歴史の効用とは、具体的にいかなるものであるか、をさぐってみた。その方法は、前述の日本の場合に比べて、完全に趣を

異にする。何となれば、日本の場合には、いくつかの特殊テーマを中心とする歴史家の業績を材料にして、彼らの最終的に意図する所が何であるかを見ようとしたからである。しかし、イギリスの場合には、こういう方法を採ることが短時間では不可能であった。すなわち、具体的なアルバイトを通して、こちらの欲求に合ったものを見出すことがなかなか容易でなかったのである。従って、いきおい、イギリスの場合には、比較的理屈の多い書物やエッセイを材料にして、論を進めるの止むなきに立至ってしまった。

四

イギリスの歴史家が、歴史の現実生活における効用を反省したさいには、その帰結する所が、一口で言って、「賢い市民」をつくることになるのではないか、と思う。ポラード教授は言う、「化学者や物理学者にどうしてもならねばならぬひとは、少数である。しかし、市民には、誰もがならねばならない。ところで、世界の歴史を知らずして、賢明な市民たることはできない。」（上掲書、一二頁）またホケット教授の次に示す言葉にも、耳を傾けてみるがよい。「われわれの指導者であって、非常に考え深いひとびとの多数は確信している、『ぬかりなく編集されたわが国の歴史の抜萃が、訓練の行届いた教師によって正しく教授されるならば、それは、歴史という課目を若いひとびとに面白くするばかりでなく、彼らを一人前の市民に鍛えあげるための最善の手段の一つ（one of the best means of training them for citizenship）である』と。」（上掲書四頁）

ところで、一挙に、歴史が賢い市民をつくるという段階に進んでしまう前に、中間の過程として、次のことがらを考察してみたい。歴史を研究することが、歴史家自身に、また歴史を教えることが、スクールの生徒や大学の学生に、具体的に言って、どのような訓練をもたらし、どのような能力を付与することになるであろうか、と。イギリスの歴史家は、多くの場合、三種類の効果を考えている。第一に、想像力と共感の陶冶。再びポラードの言葉を、ここに引用しよう。「この理解（《歴史的理解》の意—訳者）には、二つの才が他のどんなものにもまして不可欠とされる。一つは想像であり、他は共感である。しかも、これら両者を、歴史の勉強によって養うことが、歴史教育のなかのもっとも貴重な要素の一つとされるのである。」（四頁）同様に、ノールズ教授は、過去に生きた男女への人間的な理解と共感、および愛情がいつでも最大の歴史家をつくりあげるための要素であることを明言しているし、またそれらが大学における歴史教育の人間形成の上に果たす貢献のうちでは主要なものに属することをも承認している（『ヒストリア』一六一号、二三三—三頁）。さらに、文部省編の手引書によると、「想像を積む経験」（Imaginative Experience）は、歴史を教えることの重立った動機をかたちずくる。「それ（《歴史的事柄》の意—訳者）を正しく理解するのには、共感をともなう想像という能力が求められる。すなわち、自分自身の時代と自分の馴れ親しんだ物事について謙虚になることであり、進んで別様の体験のうちに入りこもうとする意欲である。」（一九頁）そして、同じ手引書は、このような想像力を富ます教育にもっとも役立つものが、特殊テーマを取扱う“patch studies”であると説く。その主張を要約すると、ここで学習されるべき対象は、現在の諸制度や先入

的観念とはっきりした結びつきをもつことがあり得ないかも知れない。しかし、それ故にこそかえって、想像力を豊かにするのには有効なのである。というのは、"patch studies"は、自身に全くなじみのうすい雰囲気と物の見方とに入りこんで行く仕方を、概観的歴史の場合よりもずっと容易に習得させることできるからだ。ややくわしく説明すれば、普通のいわゆる概説では、過去から現在にまでもたらされた遺産といったものが重視される結果、現在肝要とみえる制度とか思想（たとえば、民主政治、科学的知識、輸送の問題など）から出発して過去の探求をはじめ、そのような現代的意識を過去に移入し、その時代には第一義的でなかったかも知れぬ価値基準をもって判断を下すということになりがちである。他方、パッチ・アプローチでは、過去のある時代を対象として、その時代特有の生活のあり方をば、現在との結びつきを離れ、そのこと自体を目的として勉強することに没頭し、その範囲内において想像の飛躍をほしいままにする。例を示すと、十三世紀が取上げられた場合、前者の立場では、マグナ・カルタ、シモン・ド・モンフォール、エドワード一世の議会、ウェールズ征服といったものだけに、教師の注意が集中するであろう。しかし、後者の立場では、恐らく、十三世紀に生を享受した男女にとって大切に見えたもの、すなわち荘園内およびギルド内のひとびとの暮し方、フランチェスコ派やドメニコ派の到来、あるいはエドワード議会の召集を受けていやいやながら旅路につこうとするナイトの姿など、時代のそういう特殊相に教材の中心がおかれるであろう。それらは、十三世紀の基準をもって計れば、非常に重要であるかも知れない。しかし、今日のわれわれにとっては、あまり意味がない。にもかかわらず、現在とは全く相違した習癖と価値の尺度をもった別個の時代の奥深く生徒を導き入れることによって、彼らの想像的体験を豊富にすることが可能となる。パッチ・アプローチは、その点で、単なる一般的概説を教授する場合よりも、はるかに実り豊かなメソードであるのだ。

過去の事実を追求し、事実に基ずく想像力を働かすことによって、過去を現在に再現し、過去の時代に生きたひとびとをよみがえらせることは、イギリス正統史学のなかに組みこまれた一特質である。それは、わが国の学者にとっては縁遠く、また悠長きわまりないように思われるかも知れないが、イギリス史学のなかでは、相当に根強く、誰の目にもはっきりした一特質と見てさしつかえない。そのもっともいちじるしい代表者が一九六二年の夏高齢をもって物故したG・M・トレヴェリアン教授であった。彼はまれに見るほどの詩的想像力に恵まれた歴史家であり、その天分をもって歴史を広い読者層のものとした。彼の基本的な考え方は、たとえば、『イギリス社会史』の序文中で次のように述べられている。「過去が現在と同じように現実であったことをわれわれに感得させるのは、歴史の詳細な研究である。世間では、われわれ歴史家がほこりまみれの死せる記録に没入し、『灰色のよろいに身をかためしおぼろげなる亡霊……』以外には、何ものも見ることはできないと想像している。しかしわれわれが過去の記録をひもとくとき、われわれにとってそれらは形、色どり、身ぶり、情熱、思想を帯びる。古今の先人を、日常の行動そのままにおいて、すなわち臣従の礼を尽すために騎行したり、あるいは投票するために出かける、または隣人の荘園領主邸をおそって年少者をかど

わかす……というような過去の仕事にたずさわっているさまを見得るのは、ただ歴史の研究によってのみである。」（序、九頁）かくて、ここでは、歴史がいちじるしく文学に接近する。正確に言うと、歴史は、科学と文学との、真実と詩との総合的立場をとることとなる。

歴史の勉強もしくは研究がスクールの生徒や大学の学生に与える訓練の第二は、厳密な客観性を尊重する科学者的精神、また材料の信頼性を確定し正誤を選ぶ批判的精神である。それは、ホケット教授が "the intellectual honesty" と名付けたものである。上に述べたところでは、もっぱら、歴史の研究に想像と共感の大切なことが取扱われていた。しかし、それらは、歴史という学問の場合、どこまでも事実を追求したうえでの話であり、事実を基礎としたものであることを要する。加うるに、その事実は、正確な事実であり、客観的に間違いのないことが証明済みの事実である。そういう意味で歴史家は真理を愛するのであり、彼らは科学者である。ノールズ教授は断言する、「真理に到達するには、真理を使わねばならない。それ自体吟味を終った証拠とか典拠とかの支持を受けない陳述を決してなさないという確固たる用心に、いかなる技術も学問も代り得ないのである。歴史を書くひとが顧慮すべき最初にして最後の事柄は、たとえ大学卒業前の段階にあっても、またたとえ精神の疲れ切ったときでも、次のような注意を払うことである。すなわち、引用にはどんなものでも注を付し、その存在が分っていてしかもそこに非常に重要な事実が内容として入っているかも知れない書物や記録をさがすことに労を惜しまず、また確実に証明されてない判断の表明もしくは形容詞は、どんなものでも改めてみようとする努力、そのような注意である。」（全上、二三二頁）

真理を使うこと、それは確実で信頼できる史料にいつでも立脚することにほかならない。歴史の研究に当って、われわれは、ただ今日まで残された記録、年代記、書簡、物語などを媒介としてのみ、過去のひとびと、過去の事件に接触し得る。従って、われわれの使用する材料にどの程度まで信頼性をおき得るかということがはっきり分っていなければ、われわれの判断と立論を確実なものとすることはできないのである。ここから、どんな歴史家にも、史料批判ということが、不可欠の要請となって迫ってくる。そして、歴史研究のあらゆる分野で、想像および共感と同じく、批判的精神が歴史を勉強するものの基礎的条件となるが、また逆に批判的精神そのものが歴史研究を通して養われて行くことも否定し難い。大学で、あるいは大学院で、一人前の歴史家として仕上げられて行くということは、要するに、史料操作のきびしい方法を学びとり、ホケットの言う "the intellectual honesty"——われわれはややともすれば、そこから逸脱するの誘惑に駆られやすい——の精神をわがものとすることである。スクールの生徒にも、少しはこういうことが期待できるであろう。思うに、厳密な史料批判という形で、歴史という学問の科学性をうち立てたのは、十九世紀の歴史家の大きな功績であった。イギリスの歴史家のなかでは、歴史学を一概に科学ときめつけてしまうことには抵抗が多いけれども、ひとり史料批判に基く客観性という面では、歴史の科学であることを一致して承認する。またそういう点で、歴史の教育に及ぼす効果の大なることも、彼らの間で異論のない

所なのである。

歴史研究および歴史教育が人間形成の上に果す第三の役割として、イギリスの歴史家は、それが物事をダイナミックにとらえることを教え、変化の過程において理解させるという作用をあげている。再び、ノールズ教授の言葉に耳を傾けよう。「歴史の動的（ダイナミック）な、また流れるような本性について認識を得ることは、一層困難である。歴史は、数限りない時点において見られる運動、生き動きかつ変りつつある人間を取扱う。無論、人間の行動の変化に応じて、人間のつくった制度、思想も変化して行く。どんな変化でも、それが来るがままに認識し、来るがままの姿で示すということは、歴史を読みかつ書くものにとって、もっとも困難な仕事の一つである。」（全上）すべての物事を、静的あるいは固定的に考えるのでなく、動的に、あるいは変化しつつあるものとしてとらえねばならない。われわれ自身は時代とともに変化し、時代はわれわれ自身とともに移り行く。このような認識を少しでももつことが歴史研究から生れてくる収穫の一つである。

ところで、変化の過程においてあらゆる物事を把握することは、そのきわまるところ、恒久性をもった普遍的・絶対的真理の否定に行きつくであろう。たとえば、道徳的基準というものを取上げて言えば、時代の異なるに応じて道徳的基準もまた異なるとするのが、歴史的評価と称すべきものなのだ（ボラード、上掲書、一一頁）また制度とか思想とかを研究の対象にするにしても、制度・思想それ自体を考察するのではなく、その時代の実際的情況に結びつけて理解しようとするのが歴史的思考というものなのである。しかしまた、流転の相を強調することは、変化のうちに変化しないものを認識するという逆効果を生ずるかも知れない。ラウスが注意を促すのは、そういう点である。彼は、一九二〇年代、三〇年代のイギリス人が、不幸にも、ドイツの発展史について無知であったと言う。フリードリッヒ大王からビスマルクへ、カイザー・ヴィルヘルム二世へ、そしてヒットラーへと続く生成発展のなかで、よく観察すれば、一貫して変らないものがある。力への信仰、力による侵略、自分の行為に対する責任感の欠如……こういったものを認識し得なかった所に、イギリスの対独宥和政策が生れ、またひいてははなはだしい惨禍をともなう大戦争がひき起されたのである。

五

以上に述べた歴史を学ぶことがもたらす三つの恩沢が、いわゆる賢い市民の育成といかなるつながりをもつか、いまくどくどしい説明を必要としないであろう。第一の想像力と共感の涵養という点について言えば、それは要するに歴史が他人の気持の分る人間、他人の立場に自分をおいて考えることのできる人間をつくりあげることを意味する。このようなひとびとをなるだけ多くふやすことが、われわれの社会生活を愉快なものにする上において、大いに役立つであろう。第二の科学者的・批判的精神の習得について言えば、このことは、歴史がその学習者に周囲に起る諸問題に、感情的にではなく、冷静かつ理性をもって対処する可能性を授けるに至るであろう（ホケット、四頁）。また今日のようにマス・メディアの極度に発達した社会では、賢い市民とは、何よりもま

ず、ジャーナリズムの扇動によってかき乱されない精神の持主であることが求められる。歴史研究・歴史教育のもたらす厳格な批判精神が身についたひとであるならば、大抵の場合に、正しい材料に基き、正しい判断を下すことができるであろう。そして、ジャーナリズムの熱狂を心静かにながめるだけのゆとりと慎重さをもつことができるであろう。このことは、言うまでもなく、賢い市民としてのもっとも重要な資格である。第三に歴史学の教える物事のダイナミックな把握と実際生活との連関について言えば、前者は普遍的・絶対的価値の否定（すべての価値は時代の移り行くとともに変転する、との認識）から出発して相対主義的な考え方に至らしめ、この世の中にテーゼ＝アンティテーゼを設定することの愚かさを悟らせる。これについては、やや長くなるけれども、ポラード教授の明晰にして興味ある説明を引用しよう。「一党派、あるいは一つの問題の一面が全く正しく、他は全く間違いとみなすならわしがかもし出されてくるのは、かの闘争的本能のなせるわざである。もしもひとびとが、自分たちは敵からほんのちょっとした意見のくいちがいと取るに足らぬ程度の誤謬だけによってへだてられているのだということを認めるならば、戦に向うことは、文字通りにも、またそれにたぐいした行為としてでも、ありえないであろう。しかし、歴史研究のおもむく所は、問題になることがほぼすべて量的であることを示すにある。すなわち、問題は、この党派が正しくもう一つが悪いかどうかにあるのではなく、どの程度までこの党派が正しくもう一つが悪いかにあるのだ。」（傍点訳者、上掲書、七頁）ラウスの言葉を借りてあらわせば、このことは歴史の勉強がひとに「仰仰しさ」（pretension）に対し、懐疑的にを思わせることにもなるであろう。そして、この仰仰しさがえらそうに聞えれば聞えるほど、一層用心せよと教えるであろう（一一五頁）。かくて、歴史研究により現実をよく知った賢い市民――少しはペシミストであるかも知れないけれども（ラウス、全上）――がある程度までつくりあげられて行くことは、否み難いように思われる。

しかし、前節のはじめで、私は賢い市民とは政治的知恵の持主でなければならぬことを指摘した。ところで、イギリスの歴史家が一般に歴史家と政治との結びつきを強調し、政治家たるものの素養として歴史の勉強をすすめることは並並ならぬものがある（歴史を定義して“past politics”と称したジョン・シーリー卿以来のことかも知れない）。もっとも前掲の、歴史教育から受ける三つの恩沢そのものが、やはり一人前の市民が民主主義社会で自分の政治的権利・義務を行使するための基礎的条件である。しかし、ここでは、もう少し直接的な観点から、歴史の勉強と政治生活との関連を論じてみたい。

ポラードやラウスによると、第一に、歴史は政治の背景を理解させるということになっている。「政治的な出来事を的確な展望をもって理解させたり観察させたりすることの可能なだけの背景を、歴史研究は提供する。というのは、どんな政治的出来事でも、歴史的発展の結果であるからだ。もしもわれわれがそれにどのようにして対処すべきかを知ろうと欲するならば、その出来事が起ってきた元になるものと、その出来事の起り方とを正しく理解しなければならない。」（ポラード、八頁）「私が何をもって歴史の効用の第一――唯一ではないけれども――と考えるかは、諸君にも

すでに推察はついたと思う。その効用とは、歴史が、他のいかなる訓育にもまして、諸君の時代の国民全般に関係した事件、事柄、趨勢を理解させ得るということなのだ。……歴史は人間社会を対象とするその物語であり、それがいかにして現在あるがごとき社会になったかを示してくれる。いくつかの社会が今日に至るまでずっとどのようなものであったかを知るならば、その進展の理解を手がかりにして、それらの社会の内部に働く原動力、それらを動かす流れと力、諸事件をかたちずくる一般的にしてまた個人的な動機と矛盾、諸君はそれらをとらえることが可能となるであろう。」（ラウス、一八頁）

また文部省編の歴史教育手引書によると（七〇―一頁）、グラマー・スクールの高学年において、歴史の授業は政治的良識を養うためのもっとも適切な場であると言う。特に、理科系の生徒のために、そうであると言う。何となれば、文科系の生徒は、他の授業でも、彼らの政治的思考を不断にきたえられている。しかし、理科系の生徒のカリキュラムには、政治教育をほどこすためのものがあまりないのだ。そこで、歴史の教師は、彼らのためにガイドとなってやらねばならない。そして、彼らが今日の複雑な政治問題の根底にあるものを正しく理解するように手助けしてやり、また科学の分野で優秀をうたわれた頭脳が、こと政治問題に関して、極度に愚かしい判断を下すということがないように、早くから手を打っておかねばならない。無論、そのための教材としては、政治史がふさわしいのである。偏見を一掃し、公平な立場で教授される政治史のコースは、市民としての科学者を養成することになるであろう。それは、時事問題を討議する時間よりも、生徒にとってはずっと有益な授業であるかも知れない。

しかし、歴史教育は、とりわけ将来の政治家にとって重要である。ラウスは言う、「歴史の知識は、社会を高所にあって指導するということにとって不可欠なものである。高等教育で歴史が特別に重視されるのは、そのためである。そして、教育の程度が高くなればなるほど、歴史の重要度もまた加わって行くのだ。」（一九頁）また大統領の特別補佐官として政策決定の要衝につらなる幸運に恵まれたシュレジンガー教授は、自身に与えられた貴重な体験から次のように述べている。「私は今日でも公共政策の面で助言を提供するには、歴史家が他のひとびとよりもすぐれた資格を、持ち前として有しているわけではないと信じている。しかし私は、要職にある政治家は、歴史の知識、全体的傾向を知る素質、世界の動向を知る感覚といったものをもたなければならないことを、信じて疑わない――彼が歴史的過程の本性について彼自身の考えをもたねばならないことを、私は信じて疑わない。」（『日米フォーラム』九巻八号、一四頁）「もしも経験としての歴史（history-as-experience）に身をさらすことが、歴史家に、記録としての歴史（history-as-record）の正確さを少しでも疑わせることに導くとするならば、それはまた彼に、記録としての歴史が将来における歴史の実際の展開をととのえるべき知的風土（the intellctual climate）のなかの基礎的部分にほかならぬことを――（従って）歴史感覚は政治家たるものにとって欠くことのできないささえであることを――納得させる。」（一六頁）第二次大戦の難局を背負って立ったチャーチルの歴史に対する考え方も、またこのようなものでなかったか。

結　語

以上述べたところを、本稿の最初に紹介したオックスフォードの学生たちの動向と照らし合わしてみるときには、それが今日の段階で魅力を失い、説得力をなくしつつあることは、当然の帰結として肯定できる事柄であろう。にもかかわらず、それはまたどこかで、その程度は分らぬにしても、信奉者をもっているし、さらに信奉者をもち続けてゆくであろう。かりに若いひとびとを充分に牽引できなくなっても、辛抱強く時期を待たねばならない。再び顧みられる日の来るを確信して、歴史を学んで無駄でないということを、彼ら自身の立場から説き続けて行くべきであろう。

行論のうちにおのずから明らかになったと思うけれども、私自身は、ポラード、ノールズ、ラウスらの見解にかなりの愛着をいだいている。また、こういう考え方が、今日のわが国において、役立たぬことは決してないと信じている。たとえ進歩的・行動的歴史家からは白眼視され、若い学生たちにとっては、イギリスの学生に対する以上に、馬の耳に念仏であろうとも……。というのは、われわれの周囲に考え直すべきもの、反省すべきものが多過ぎるほどあるからだ。またそれを痛感させてくれるのが、歴史研究から得られるイギリス的思考法そのものであるからだ。

（岡山大学助教授）